

第6班

近代沖縄における祭祀再編と神社

(1) 共同研究員名

研究代表者：後田多敦

共同研究員：小熊誠 坂井久能

客員研究員：津田良樹 中島三千男 前田孝和 菅浩二 加治順人

研究協力者：稲宮康人 渡邊奈津子 松山紘章

(2) 研究目的

近代日本は1895年の下関条約で獲得した台湾を皮切りに、拡大した植民地に海外神社を創設させていった。その海外神社創設や宗教支配のいわば前史として、沖縄や北海道での宗教政策や神社政策が存在している。近代沖縄における神社や宗教政策を見ることで、海外神社の意味がより具体的に浮き彫りになると考えられる。

明治政府は1872（明治5）年に琉球国王の尚泰を琉球藩王に封じ、さらに1879（明治12）年には琉球藩を廃止、沖縄県を設置した（「琉球処分」と呼ばれる）。琉球国では聞得大君と呼ばれる女神官を頂点とした女神官が担った琉球国独自の国家祭祀制度（国王の長寿や国家の安泰を祈願した）が存在していた。他方で、琉球八社（官八社）と呼ばれる日本系の神社が王府と直接的に結びついていた。また、琉球国は明・清の冊封体制に参加していたため、冊封体制を支えた儒教もまた社会へ深く浸透していた。

新しく設置された沖縄県は、祭祀においても他県とその前史が異なっていた。冊封体制に参加していたという点では、朝鮮と共通している。沖縄県を設置した明治政府はかつての琉球国の祭祀制度を再編していくことになる。琉球の固有の祭祀の再編、前近代から存在する日本系神社の活用、県社など新しい神社の創建などを具体的に行っている。

海外神社と異なり沖縄の、これらの「宗教施設」の多くは現在でも信仰の対象となっている。また、その歴史的背景や基盤も異なっていることもあり、近代における沖縄の神社、寺院、御嶽などの総合的な研究は存在しない。また、沖縄戦による断絶などもあり、利用できる文字資料も少ない。そのため非文字資料という視点からのアプローチは、近代日本の「内地」と「外地」の接点である沖縄の戦前から戦後の変化を、「宗教施設」を通して具体的に提示できるもので、多様な研究が期待できる。

なお、共同研究の対象は琉球・沖縄とするが、海外神社の前史と言う問題意識からもCOE時代からの海外神社研究も副次的に継続する。特に、これまでの成果をデータベース（新に「海外神社跡地」のデータベースを構築する）や出版（写真集やこれまで出された共同研究論文の出版・論文集）と言う形で発信する。

(3) 活動経過（目的達成のための方法、各年度の研究・調査経過、成果の公開状況等）

1) 班内研究会

① 2018年3月3日（於：神奈川大学）

金泰順「沖縄のミロク信仰」

津田良樹「現地調査からみた琉球における神社のありよう」

後田多敦「琉球祭祀儀礼の中の『崇元寺』」

② 2018年12月15日（於：神奈川大学）

前田孝和「戦後沖縄県神社界の課題について——神社庁誌を中心に——」

坂井久能「管内神社とは何か—

—独立混成第45旅団の八重山神社を事例として——」

2) 非文字資料研究センター公開研究会

① テーマ：「琉球・沖縄の御嶽と神社」

2017年7月21日 参加者80人余（23号館203号室）

波照間永吉「沖縄のウタキの構造—その展開を探る」

加治順人「琉球・沖縄の神社—その遡源と変遷」

後田多敦「『琉球処分』とその後の琉球祭祀の再編」

② テーマ：「宮古・八重山の御嶽と神社」

2018年7月7日 参加者80人余（23号館206号室）

下地和宏「宮古の祭祀と神社」

大田静男「御嶽の神々と八重山神社建設」

比嘉豊光「ナナムイ」（宮古の祭祀映像）

3) 展示会

① 「『帝国日本』の残影 海外神社跡地写真展」

2019年7月31日（水）～8月4日（日） 参加者673人

（横浜市民ギャラリー 1階展示室）

ギャラリートーク（8月3日、4日）

中島三千男、稲宮康人

4) 共同調査

① 2017年9月20日（水）～23日（土）

沖縄島の神社・御嶽調査

参加者：後田多敦、中島三千男、津田良樹、前田孝和、菅浩二、稲宮康人、坂井久能

② 2019年3月13日（水）～16日（土）

石垣島の神社と御嶽調査

参加者：後田多敦、津田良樹、前田孝和、稲宮康人、坂井久能

5) 個別調査

* 2019年8月16日～19日 中国天津・大王廟跡調査（後田多敦）

- * 2019年11月1日～2日 首里城火災跡調査（後田多敦）
- * 2019年12月14日～16日の3日 沖縄・座間味島のマカー、忠魂碑及び沖縄県立図書館での資料調査（前田孝和）
- * 2019年12月31日～2020年1月1日 沖縄・護佐喜宮（名護市）、泡瀬ビジュアル（沖縄市）、白銀堂（糸満市）の初詣風景調査（前田孝和）

6) 関連シンポジウムなどへの参加

- ①「よみがえる宮古島の祭祀写真—『神々の古層』比嘉康雄・『太古の系譜』上井幸子—」（主催：まぶいぐみ実行委員会）2018年11月4日 浦添市美術館
パネリスト：後田多敦、安里英子、赤嶺政信
コーディネーター：比嘉豊光
- ②「八重山の祭祀と写真」（「ときがみつめる八重山の祭祀写真」展と連動したシンポジウム、主催：まぶいぐみ実行委員会）2019年12月21日 沖縄・佐喜真美術館
パネリスト：後田多敦、波照間永吉、安里英子
コーディネーター：比嘉豊光

7) 神奈川大学公開講座（生涯学習・エクステンション講座）

- ①「海を渡った神社とその後」（2017年）
 - ・第1回（6月3日）
海を渡った神社と現在（中島三千男）
 - ・第2回（6月10日）
日本国による琉球祭祀の再編——海外神社の先駆け（後田多敦）
 - ・第3回（6月17日）
台湾：夥しい神社遺蹟が残る謎について（金子展也）
神社遺跡は何を語るのか——台湾を中心に（津田良樹）
 - ・第4回（6月24日）
神社遺物を見つけること——朝鮮半島を中心に（辻子実）
朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の神社跡地を訪ねて（中島三千男）
 - ・第5回（7月1日）
樺太・「北方領土」・ハワイの神社のありよう（前田孝和）
 - ・第6回（7月8日）
旧満洲国神社と開拓団神社から見えてくるもの（津田良樹）
 - ・第7回（7月15日）
近代宗教史の中の海外神社——祭神から考える「日本」の拡がり（菅浩二）

(4) 研究成果（成果物、獲得された知見、収集資料の解題等）

1) 著書

- ①稲宮康人、中島三千男

『非文字資料研究叢書2 「神国」の残影』(国書刊行会、2019年)

②中島三千男

『天皇の「代わり儀式」と憲法』(日本機関紙出版センター、2019年)

2) 報告・論文など

- ・中島三千男「植民地期、台湾の社・祠 VS. 朝鮮の神祠・神明神祠
—村落レベルにおける海外神社の比較検討—」
(『非文字資料研究センター News Letter』No.38、p6、2017年9月)
- ・前田孝和、金子展也、坂井久能「台湾本島及び澎湖諸島の神社跡地等の調査」
(『非文字資料研究センター News Letter』No.38、p18、2017年9月)
- ・後田多敦「琉球・沖縄の御嶽と神社」
(『非文字資料研究センター News Letter』No.39、p6、2018年1月)
- ・加治順人「沖縄の神社、その歴史と独自性」
(『非文字資料研究』16号、p37、2018年9月)
- ・後田多敦「処分されつづけなお問う—戦争や日本化をくぐり抜けた神々」
(『沖縄タイムス』2018年10月30日)
- ・松山紘章「宮古・八重山の御嶽と神社—近代沖縄の地域社会と祭祀再編—」
(『非文字資料研究センター News Letter』No.41、p2、2019年3月)
- ・中島三千男・津田良樹・稲宮康人「旧オランダ領東印度(現インドネシア共和国)に建てられた神社について」
(『非文字資料研究センター News Letter』No.41、p17、2019年3月)
- ・稲宮康人「フィリピンの神社跡地調査報告」
(『非文字資料研究センター News Letter』No.41、p24、2019年3月)
- ・前田孝和「大濱用一文書」に見る八重山神社建設計画と未鎮座の背景
—「近代沖縄における祭祀再編と神社」視点序章—
(『非文字資料研究センター News Letter』No.42、p29、2019年9月)
- ・後田多敦「近代沖縄における祭祀再編と神社」班 石垣島調査報告」
(『非文字資料研究センター News Letter』No.42、p25、2019年9月)
- ・稲宮康人「『帝国日本』の残影 海外神社跡地写真展」
(『非文字資料研究センター News Letter』No.43、p2、2020年3月)
- ・後田多敦「天津の大王廟跡地調査報告 幸地朝常の足跡を求めて」
(『非文字資料研究センター News Letter』No.43、p6、2020年3月)

(5) 今後の課題と展望(自己点検・評価)

本研究班の大きな主題は、近代日本と「海外神社」に関する第I期から第III期までの研究を引き継ぎながら、「本土」と「外地」の境目でもある沖縄の祭祀再編と神社の問題を整理し、位置付けていくことだった。

現地沖縄の研究者を招いた2度の公開研究会は、沖縄における祭祀研究の動向と、祭祀や祭祀空間をめぐる現状を整理することになり、問題意識や視点のすりあわせを行うことができた。また、共同の現地調査も、その前提を現場で確認する意味をもった。ただ、班内の研究会は日程などの関係でなかなか開催できなかつたため、班内の議論が深められなかつた。そのため、沖縄の祭祀再編の問題を「海外神社」との関連で深めた具体的な議論まではできなかつた。

今期の成果としては、沖縄の伝統的な祭祀空間である御嶽の研究と、神社の研究との議論の場を設定し、問題点や課題などを位置付けできたことを挙げるができる。従来の沖縄の祭祀空間をめぐる研究では、御嶽と神社の研究はそれぞれ別次元で行われていたが、それを一つの視点で整理したことに意味がある。その過程で、前近代からの神社と近代に創建された神社との質的な差異、さらに沖縄の伝統的な祭祀空間の神社化の問題の意味なども浮かび上がってきた。

資料の発掘などの成果は少なかつたが、成果の一つである八重山神社に関する「大濱用一文書」の確認は重要な意味を持っている。この資料は、戒厳令がしかれたことにも相当する沖縄戦下の石垣島における神社の意味を明らかにする手がかりとなる。また、沖縄島の沖縄神社や宮古島の宮古神社などの内実の解明とも結びつく可能性もある。

共同調査では、沖縄の神社の現状、石垣島では戦争と神社の関連などの論点も見てきた。また、石垣島では尖閣神社を確認することができ、現在の社会的な動向と結びついた神社の姿も見えてきた。

概観的な研究にとどまったが、近代における沖縄の祭祀再編の問題が、「海外神社」と結びついていくことを再確認できたことは、次の研究につながる成果だと考えている。つまり、神社跡地や再編された祭祀空間を通して、「日本」の境界や「内地」「外地」の境界、さらには近代「日本」の在り方を浮かび上がらせることができるということである。

今後は個別の視点を深めつつ、「日本」の周縁における近代の祭祀空間の再編の在り方を確認し、神社や祭祀空間を通して具体的な共通性と個別性を明らかにすることが必要である。近代日本は領土や植民地、支配地域を拡大していったが、その方法は一様ではなかつた。拡大していった地域における祭祀空間の在り方を明らかにすることで、「日本」の支配や統治の実像を知ることができると考えている。

今期を継承する研究班では、奄美や北海道などの地域も見ながら、さらに全体を整理し個別の事例を深めることで、神社跡地や再編された祭祀空間から見えてくる共通性と個別性を確認することに取り組みたい。